



2013 (平成25) 年12月14日
全5枚 (本紙を含む)

報道関係各位

学校法人 日本女子大学

第九回「平塚らいてう賞」贈賞式を開催

顕彰1件・・・肖霞氏 (中国 山東大学 外国語学院 日本語科 教授)

奨励1件・・・高橋 順子氏 (日本女子大学 人間社会学部 現代社会学科 助教)

特別1件・・・東日本大震災女性支援ネットワーク

(共同代表: 竹信 三恵子氏・中島 明子氏)

日本女子大学では本日午後、第九回「平塚らいてう賞」贈賞式を本学新泉山館 大会議室 (目白キャンパス) で開催しました。「顕彰」を受賞して中華人民共和国から来日された肖霞氏、奨励を受賞した高橋順子氏、特別を受賞した「東日本大震災女性支援ネットワーク」へ各々、本学学長 佐藤和人から賞状と副賞賞金を贈呈いたしました。

式典では選考委員のあいさつや講話と総評を経て、各受賞者がスピーチ。参加者との交流茶話会を挟んで、前年度顕彰受賞者の秋山佐和子氏による記念講演を行いました。

「平塚らいてう賞」は「平塚らいてうの記録映画を上映する会」のご芳志をもとに、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏 (1906年日本女子大学卒業) の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対して、顕彰と奨励をはかることを目的に創設されました。

募集にあたっては、本趣旨を社会に広く伝えることや今後の活動が進展することを願い、全国で研究や活動を行っている個人または団体を対象としています。顕彰はこれまで際立った功績をあげた方へ授与し、奨励は研究や活動を継続的に行なっている方、あるいは新たに取り組もうとしている方に授与します。本年はさらに、東日本大震災での女性支援を焦点とする活動を行っている同ネットワークへ、特別賞を設けました。

本賞は平塚らいてうの精神を受け継ぎ、平和で平等な21世紀の社会を作るために、今後もこれからの社会を担う多くの若い研究者や活動家の本賞への応募を期待しております。

お問い合わせ先

日本女子大学 総務部 広報渉外課 「平塚らいてう賞」事務局

電話: 03-5981-3163 1 FAX: 03-5981-3164

日本女子大学学長 佐藤 和人あいさつ

平塚らいてう（日本女子大学校 家政学部3回生）の卒後100年を記念して「平塚らいてう賞」が創設されました。本賞は平塚らいてうの遺志を尊重し、「男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動」の顕彰と奨励をはかることを目的としています。

平塚らいてうは青鞥を創刊、婦人参政権運動に力を尽くし、さらには平和運動のシンボルとして多大な足跡を残しています。その行動はまさに創立者成瀬仁蔵の「魂の子」と称され、本年は「平塚らいてう賞」第九回の贈賞式を迎えました。

「顕彰」として中国・山東大学 肖霞氏の「元始 女性は太陽であった—“青鞥”及びその女性研究」が選ばれました。中国において初めての『青鞥』を手がかりとした近代日本の女性たちの全面的な研究であり、今後の国際的な展開が期待されます。また「奨励」として高橋順子氏の『近現代沖縄社会における「新しい女たち」—沖縄初の女性校長砂川フユを中心に』、「特別」として東日本大震災の被災者、特に女性へ焦点を当てて復興支援を続けている「東日本大震災女性支援ネットワーク」の活動が選ばれました。

いずれも「平塚らいてう賞」にふさわしい研究・活動であると高い評価を受けました。今後のさらなる発展を期待したいと思います。

～第九回「平塚らいてう賞」贈賞式リーフレットから～

第九回「平塚らいてう賞」選考委員発表コメント

第九回受賞者の選考にあたり私どもは、候補者の業績を広く、世界の女性のさらなる解放、問題の解決、平和問題や地域社会への公正な目配りと着実な行動の継続という観点から論議し、以下の諸業績に対して、各々「顕彰」「奨励」「特別」に値するとの結論に達しました。ご業績の特色や褒賞に値する観点は以下の通りです。

< 顕 彰 >

受賞者：肖霞氏

研究テーマ：「元始 女性は太陽であった—“青鞥”及びその女性研究」（邦訳後のタイトル）

受賞理由：平塚らいてう賞に初めて、中国（山東大学）の方が応募された。雑誌『青鞥』を手がかりに近代日本の女性を対象とする研究で、中国語版『元始女性は太陽—“青鞥”及其女性研究』が山東人民出版社より2013年6月刊行された。全9章428ページに及ぶ大冊である。

中国において女性研究は未だ十分に広がっておらず、さらに国際比較の視点はこれからの課題であり、中・韓・日の女性史研究の交流もようやく始まろうとしている段階にある。このような時期に本書が出版され、平塚らいてう賞に応募されたことは貴重であるといえよう。

本書は『青鞥』をめぐる社会的状況の説明に若干の問題はあるが、課題別に資料や

研究や文献が丁寧に紹介・検討されており、付として、『青鞥』年表及び目次一覧、詳細な参考文献が付けられている。

肖氏も「『青鞥』が登場して百年以来中国初めて全面的な研究だと思われる」と言われており、今後本書を基礎として中国国内に研究が大きく広がるものと思われる。

今後は、本書の緒言で言及されている「中国女性解放と日本のそれとの関係」や「世界の女性解放運動に与えた貢献」などの諸課題がより深められることを望みたい。

<奨励>

受賞者： 高橋 順子氏

研究テーマ： 「近現代沖縄社会における“新しい女たち”」
－沖縄初の女性校長砂川フユを中心に－

受賞理由： 沖縄県初の女性校長砂川フユを中心に、近現代沖縄社会の「新しい女たち」の登場と活動を明らかにしようとしている。フユの学んだ沖縄県女子師範学校は、県内一の女子教育のエリート校であり、『青鞥』が読まれたり、沖縄研究に大きな足跡を残した著名な伊波普猷が招かれたりしている。

沖縄の女性たちの、特に第二次世界大戦後における米国占領下の実態と重ね合わせ、女性たちの新しい多様な活動を明らかにすることが期待される。

<特別>

受賞者： 東日本大震災女性支援ネットワーク（共同代表－竹信 三恵子氏・中島 明子氏）

活動テーマ： 「東日本大震災で被災した女性たちのニーズが支援活動や復興過程に反映させられると共に、復興支援の諸政策にジェンダー・多様性の視点が組み込まれること」

受賞理由： 東日本大震災女性支援ネットワークのメンバーの方々は、3年間にわたり共同代表の竹信三恵子、中島明子両氏を中心として東日本大震災の被災者―特に女性に焦点を当て、復興支援活動を続けてきた。

その特色は次のようなものである。

- 1：明確な目標と活動方針をもち、それに基づき活動を展開している。
- 2：復興過程におけるジェンダーおよび多様性の問題を直視し、できる限り女性や災害弱者の存在に注目し、問題解決を計ろうとしている。
そのための人材育成の必要も視野にいれている。
- 3：コミュニケーションを重んじ、ネットワーク内外で意見交換し、新しい復興支援のあり方を提案している。
- 4：視野を広く活動し国連や女性の人権団体とも交流している。
- 5：常に活動の成果をまとめ、チラシから単行本までさまざまな形で記録を残している。これらは現在のみでなく、将来の災害時にも参考となろう。

総じて言えば、このネットワークの方々は、災害支援をきっかけに多くのことを実践しながら学び、これまでにない新しい支援のありかたを経験を通して示唆している。

平塚らいてうとは直接の関係はないが、以上の理由から「特別賞」に十分値すると、選考委員全員が賛同した。

第九回「平塚らいてう賞」<顕彰> 受賞スピーチ (要旨)

肖 霞 氏 (中華人民共和国 山東大学 外国語学院 日本語科 教授)

「青鞥」の現実意義と影響

1911年、日本で創刊した雑誌『青鞥』は、日本の女性たちが文芸作品を発表する舞台でもあるが、社会批評と思想交流の足場でもある。それと同時に、女性の自我と独立を宣伝し、女性解放思想を伝播する重要な陣地である。女性たちは「貞操」「墮胎」「娼妓」をめぐる行われた論争によって、自分自身の問題を注目し、女性の性と性欲望、セクハラ、家庭暴力、同性愛、ジェンダーなどの問題を公然と討論するようになった。また、妊娠中絶の自らの決定、女性の性と就職・労働、売春問題をめぐっての討論などは、当時日本の社会現実、文壇状況及び多元化に向かう社会の文化衝突と融合の歴史状況をそのまま反映したものである。世界のフェミニズム運動から見れば、その発言は日本女性の叫びであるばかりではなく、アジア諸国女性の共同の叫びでもある。『青鞥』は、中国女性留学史及びアジアの女性解放運動を研究するのに重要な参考価値を持っている。「青鞥」の時代で、中国の女子留学はさらに盛んになり、多くの女子留学生は日本に留学し青鞥社員と同じような教育を受けるようになった。『青鞥』及びその女性群像についての研究は、20世紀1920年代における中国女性解放思想の形成を究明するだけでなく、世界フェミニズム運動が東洋各国における発展を確かめることができると考えられる。

日本女子大学は『青鞥』及びその女性たちが成長する揺りかごだと言える。創立当時の学長成瀬仁蔵は、近代の女子教育思想を強く主張し、とりわけ「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の理念は、「青鞥」女性のような“新しい女”を多く育てていた。そればかりではなく、日本近代女性の解放思想をよく啓蒙し、東アジアの女性解放運動を大きく促進した。

「青鞥」の女性たちが百年前に取り上げて論争した多くの問題は、現代の世界フェミニズム運動の核心問題となり、今日でも大きな意義を持っている。

第九回「平塚らいてう賞」<奨励> 受賞スピーチ (要旨)

高橋 順子 氏 (日本女子大学 人間社会学部 現代社会学科 助教)

本研究の目的は、沖縄県初の女性校長になった砂川フユに注目することで、近現代沖縄社会における「新しい女たち」の実践を検討し、沖縄における「女性解放」のプロセスと意味を明らかにすることである。ここでの「新しい女たち」とは、女性が活躍する時代を切り開いたという文字通りの意味と、『青鞥』や伊波普猷に関わる思想的な意味を持つ。

フユの思想を読み解き歴史に位置づける際、次の2点に注目したい。①戦前から「本土」に渡る機会を持ち、女性教員との密な交流を経験したこと②沖縄県女子師範学校を卒業したことである。県内一のエリート校で、『青鞥』が回し読みされたり、沖縄女性啓蒙に腐心した伊波普猷が講演したりと、知的交流の場であった。日本女子大学進学者も多く、在京「あけぼの会」で活動したり(東恩納よし)、沖縄で教員となったり(富原初子)、近代女子教育の先駆者として活躍した。

本研究の成果は、「新しい女たち」の多様性、沖縄近現代女性(運動)史、米軍占領下の女性史において、より広い文脈では東アジアの植民地的近代、ポストコロニアル・フェミニズムの事例として貢献しうると考える。

第九回「平塚らいてう賞」〈特別〉 受賞スピーチ (要旨)

東日本大震災女性支援ネットワーク

(共同代表：竹信 三恵子氏・中島 明子氏)

当ネットワークは、東日本大震災による惨状に呆然とし「被災女性の方々のために何かできないのか」との思いに駆られて、研究者やNGOメンバーが集まったことが始まりだった。それぞれが仕事を抱える中、力不足にいらだちながらも目指してきたのは、女性や社会的少数者を視野に入れた多様な災害支援の必要性を広めることだった。

多様な災害支援の実践事例集やブックレットの出版、行政などへの出前講座、スナップ写真に託して被災女性の思いを表現する「フォトボイス」、被災下での性暴力調査、女性被災者の支援者調査、といった情報発信の数々を支えたのは、復興へ懸命の努力を続ける被災地の女性たちと、多数の女性支援者たちの存在だった。

当ネットは今後、情報保障のため、サイトのみ残して活動を収束し、より息長い活動へ向けてメンバーの一部による出前講座などを中心とした新組織へ移行する予定だ。いただく賞金はそのための貴重な支えになる。深く御礼申し上げたい。

以上